心に残るお話を聞かせていただきました。

鍼灸マッサージ師　髙坂みさ子

心に残るお話を聞かせていただきました。

今目の前にいるこの患者にとって何が最善の道か、生活背景・生き方までも含めて

ともに考える SDM という医療コミュニケーションのかたちがあることを初めて知り、

エビデンスとナラティブは常に隣り合わせにあることをあらためて認識し、感動しました。

私は横浜で女性専科の小さな鍼灸治療院を開業しています。

病院に行っても長引く痛みが楽にならない、痛くないという時がない、と嘆く初診の患者さんに、

それはお辛いですね、と思わず口からでるのは、私自身が若い時から大きなケガや病気を何度も経験しているからだと思います。どうか少しでも良い方向に、と念じながら「手当て」の言葉そのままに鍼を使いマッサージを施すこの仕事が好きです。

先生が試みに生成 AI に予防的乳房切除するべきかどうかを問われたときの AI の答えには驚きました。優しく肩に手を置かれているような気さえしました。

自分で自分が置かれている状況を分析・整理したうえで自分の心の内をも見つめ、この回答に近い

ことを導き出すことは可能でしょうが、病気やケガはいつも不安・孤独とセットで自分の裡にあるので、生成 AI といえど「他者」の寄り添いは嬉しいのかもしれません。

　自分で自分の治療を選ぶ時、もっとも覚悟をもっての決断を迫られるのは、未破裂脳動脈瘤の開頭手術ではないかと思います。

30 年近く前だと思いますが、文藝春秋誌上にある手記が掲載されました。筆者は医師で、母親が脳ドックで検査をうけたら脳動脈瘤が見つかり、どうしよう、と相談された筆者は、脳動脈瘤が見つかったことを幸運と捉え、手術を受けて安心して暮らせるようになる方がいいとクリッピング術を受けることを勧めました。

結果、術前にはまったくの健康体であった母親は重い障害を負うことになった、という、慟哭が聞こえてくるような内容で、それを読んだ時の衝撃は今でもはっきり覚えています。わかりすぎることの落とし穴もあるのだ、と感じました。

　私の身近にこの手術を受けた女性が二人います。A さんは私の治療室の患者さんで、犬の散歩中に犬が何かに驚いて突然走り出したため後ろざまに倒れて後頭部をしたたかに打ち短時間意識がなくなり救急搬送された。もう一人 B さんは私の親友で、バスタブの掃除をしていたらフッと意識が遠のいて倒れ込み、それを見て驚いた娘さんが 119 番通報をした。二人とも、搬送先で受けた検査で未破裂脳動脈瘤がいくつか見つかり、血管のバイパスを作ってのクリッピング術を 2 回受けています。

A さんはこの手術で左目を失明。

B さんは失明は免れたもの、2 回目の手術でもとりきれなかった「場所と形が悪い」　　動脈瘤を残したままで、3 回目の手術に踏み切ることは患者の体力面からみて危険、

との判断で経過観察となりました。

そして二人とも、前額部に陥凹がありました。事前の説明は十分あったけれどそのことには触れられていなかったそうで、術後、これは手術の失敗ではない、女の人は髪で隠せるから大丈夫、と。

ふたりとも言われたそうです。

マニュアルがあったのかもしれません。

そのときどう思いましたかと聞くと、二人の答えは同じでした。

ドクターたちは、頭がへこむことなど些細なことに思えるほど本当に大変な手術をして私を救ってくださったのだ。ありがたい、と。

　B さんはその後、乳がんになったのですが、主治医は脳のクリッピングへの影響を考慮しながら慎重に治療を進めてくれたそうです。

その彼女は 3 年前、クモ膜下出血を発症して亡くなりました。2 回目のクリッピング術を受けてから 18 年後でした。B さんの乳がんの化学療法には、若年性認知症のご主人にかわって私が付き添い、点滴を受ける彼女の傍らの椅子に座り小さな声で色々な話をしました。最初の手術の前夜、麻酔から醒めたら失明しているかもしれないということが突然リアルなイメージをもって迫ってきて、それはほとんど耐えられない程になり、「そうだ、今すぐここから逃げよう、と思ったりしたのよ」と言いました。どれほどの苦悩だったのだろうか、と胸が痛みました。

クリッピング術から18年、その間に息子さんと娘さんは結婚してお孫さんも3人生まれました。

娘さんはフルタイムの仕事をしているうえに関節リウマチなので、子育てのサポートでBさんは大活躍。娘には恩義があるから、と、おどけて明るく言っていました。

勇気をもって臨んだ2回のクリッピング術は、彼女に時間をくれたのかもしれません。

ディペックス・ジャパンの取り組みにはかねてから尊敬の念を持っておりました。

私は2年前に神経内分泌腫瘍になりESD手術を受けたのですが、やはり同じESDを選択し、2年後に他臓器への転移があり抗がん剤治療をするも副作用がひどく、薬を変えてみてもそれは変わらず、今はやめている、という、大腸がんの項の女性のお話は、手術前、手術後、今に至るまで何度も何度も見させていただきました。自分の意思で治療を選択する、あるいはやめる、そして後悔しないこの方のつよさにはいつも勇気をいただいています。

私がこの方と同じ選択をするかどうかということとは別に、一人旅をしていて不思議にウマが合う人と出会った、という気持ちでおります。時おりは二人旅に。語り合いながら。

・

もっと多くの方たちに知っていただきたい、素晴らしい　健康と病の語りです。

ますますのご発展をお祈り申し上げております。